

Title	第二神殿時代のユダヤ人埋葬に関する考古学的研究の課題
Sub Title	Issues in archaeological research on Jewish burials in the second temple period
Author	長尾, 琢磨(Nagao, Takuma)
Publisher	三田史学会
Publication year	2020
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.88, No.3/4 (2020. 5) ,p.139(409)- 166(436)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20200500-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第二神殿時代のユダヤ人埋葬に関する考古学的研究の課題

長尾 琢磨

1. はじめに

イスラエル／パレスチナ（以下、イスラエルと略⁽¹⁾）は、地中海東岸に位置し、南北をエジプト、シリアに挟まれた地域である。そのため、古来より南北の中間地点として緩衝地・係争地としての役割を果たしてきた。これは同時に南北の文化が流入したということであり、イスラエルは様々な形で周辺地域の影響を受けてきた。バビロニア捕囚から帰還直後の第二神殿時代（ペルシア時代、プトレマイオス朝時代、セレウコス朝時代、ハスモン朝期、ローマ帝国時代）において、ユダヤ人は自らのアイデンティティを形成しながら、異文化との関わりを考えなければならなかったのである。

このユダヤ人と異文化というテーマは、文献資料を基

に多くの研究がなされており、とりわけ西アジア全体に影響を及ぼしたヘレニズムとの関わりは研究の焦点となっている⁽²⁾。考古学的にこのテーマを考える研究は限られているが、たとえば、埋葬の研究は、これらの時代の人々の思想の枠組みに迫れる有効な方法と考えられる。第二神殿時代の埋葬に関しては、ミシュナー⁽³⁾に詳細な規定があり、同時期の墓の発掘調査も盛んに行われているからである。つまり、ユダヤ人の墓は、宗教・思想とも密接に関係しており、文献資料・考古学的資料の双方から考えることができるのである。そこで、本稿は、第二神殿時代及びそれに先行する鉄器時代の埋葬に関する研究史を整理することで、考古学的側面から異文化とユダヤ人というテーマを考える際の課題を明確にするものがある。

二. 第二神殿時代のイスラエルにおける埋葬

イスラエルにおける埋葬は時代によって様々であるが、鉄器時代Ⅱ期になると定形化した横穴の石切墓⁽⁵⁾であるベンチ墓(図1参照)が主として利用されるようになった。バビロニア捕囚期は、考古学的情報に乏しく、状況が明確になっていないが、捕囚から逃れた南ユダ王国の人々がエルサレム近辺でベンチ墓を利用していたことが確認されている⁽⁶⁾(Kloner and Zielinger 2009, 219)。捕囚期と同様、ベルシア時代についても考古学的情報に乏しいため、同時代の埋葬について不明瞭な点は多い(Kloner and Zissu 2007, 139)。帰還した人々は非常に貧しかったため(Lipschits and Oeming 2006, 27-28)、ベルシア時代の墓の新規製作はほとんど知られておらず、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓の再利用が中心だったようである。アレクサンドロス大王の東征によってベルシア帝国の支配が終わり、プトレマイオス朝の支配下になってからも新規に製作された墓は少なく、同様の傾向が続いた⁽⁶⁾。

しかし、セレウコス朝の支配下になった前二世紀にこの状況は変化し、新しいタイプの墓であるロクリ墓がエルサレムに出現した。ロクリ墓はベンチ墓と同様の横穴

の石切墓であるが、ロクリと呼ばれる壁龕構造が設けられる墓であり、イスラエルにはこれまで確認されていない墓である。そのため、セレウコス朝下のヘレニズムの強制または傾倒を背景として、周辺地域から影響を受けた墓であると考えられている(後述参照)。ロクリ墓は前一世紀にはエルサレム以外の都市にも広がり、一世紀にその最盛期を迎える。しかし、第一次ユダヤ戦争の結果、七十年にエルサレムが陥落したことによりその利用は激減し、エルサレム近辺での製作・利用はほとんど確認されなくなる。以降は、一部の離散したユダヤ人がガリラヤ地方などでロクリ墓を利用するのみとなった⁽⁹⁾。このように第二神殿時代におけるユダヤ人の埋葬は、歴史的背景と密接に関係しながら移り変わっていることがわかる。同時に、第二神殿時代以前の鉄器時代Ⅱ期の埋葬習慣がバビロニア捕囚以後も継続し、埋葬の形成の一端を担っている。次章からは、これら両時代における埋葬についての先行研究を整理する。

三. 鉄器時代Ⅱ期の埋葬に関する研究

鉄器時代の埋葬に関する研究は、当初は発掘調査の報告に留まっており、膨大な報告が散乱している状況であ

った。これを体系的にまとめたものがブロック・スミスの研究 (Bloch-Smith 1992) であり、これによって初めて鉄器時代における埋葬の全体像が明らかにされた。

それによると、統一王国時代は、前時代のシャフト墓が衰退し、統一王国南部にベンチ墓が出現した。このベンチ墓はブロック・スミスによって、(1) 不定形の埋葬室に壁龕が設けられるタイプと (2) 方形の埋葬室の入口から床面にピットが掘り込まれ、入口を除いた三方向に柵が形成されるタイプに大別された。ベンチ墓は北部へと広がったが、分裂王国時代になると、分布が再び南ユダ王国に集中し、(1) よりも (2) が主に利用されるようになり、定形化が進んだ。一方、分裂王国時代の北王国では、ベンチ墓以外の人形棺やバスタブ棺などの埋葬習慣が認められるようになった。⁽¹¹⁾これは、「鉄器時代Ⅱ期に多様な埋葬のタイプが存在するのは、聖書などの文献資料から知られている異なる文化集団によるものである (Bloch-Smith 1992, 55)」と述べられているように、ギレアド地方に積極的に領土を広げようとしていたアラムや沿岸部のフェニキアに接していたためであろう。

このように鉄器時代Ⅱ期の墓の形態や分布には差があったが、そこで行われる埋葬方法にはこの時期を通して

一貫した要素がある。それはほとんどの墓で集骨と呼ばれる再埋葬が行われていたことである。集骨は、遺体を柵部分に安置して一次埋葬を行い、遺体を白骨化させてその骨を集める埋葬方法である (図1参照)。集骨は個人を区別しないため、複数人の遺骨が同じ納骨場所にまとめられることとなる。このことから、ベンチ墓は家族墓だと考えられている。再埋葬、または一度埋葬した遺骨に対する再接触は、この地方では青銅器時代から確認されているが、ベンチ墓における顕著な特徴として、骨を保護するためのリポジトリ (貯蔵穴) の採用が挙げられる (Meyers 1970, 10)。青銅器時代の堅坑墓であるシャフト墓では、埋葬室の床面に遺骨が直接置かれていたが、ベンチ墓では遺骨の多くはリポジトリに集められて納骨された。このような納骨空間を採用したこともあり、メイヤーズは、これまでの再埋葬とは異なり、鉄器時代では一次埋葬、二次埋葬を同時に同じ墓室内で行うようになったと指摘している (Meyers 1970, 11)。

ブロック・スミスらの見解は、その後の研究・発掘調査報告において広く踏襲されている。しかし、周辺地域の影響を受けた様々な墓が確認される中で、なぜ定形的で一貫性を持つベンチ墓が主流になったかについては、

明確な結論が得られないままであった。二〇〇〇年代になると、ファウストとブニモビッツは当時の人口の増加と住居形態からこの点を解釈した。鉄器時代Ⅱ期に南ユダ王国の人口が増加したことはあきらかであり、核家族に利用されていた二部屋式住居・三部屋式住居よりも、拡大家族に利用されていた四部屋式住居が増加している(Faust 2003)。この人口の増加とベンチ墓の増加の時期は一致しているため、人形棺など個人の墓ではなく家族墓であり、集骨によって多人数を埋葬できるベンチ墓が普及したと主張した。

ベンチ墓の中でも定形的なものが主となった点については、四部屋式住居との類似を指摘している。ベンチ墓は、平面形態だけでなく、アクセス方法も四部屋式住居と一致しており、両者とも入口を入ってすぐの空間を通らなければ、他の三つの空間にはアクセスすることはできない(図2参照)。四部屋式住居は拡大家族の象徴であり、同時に家族(一族)の存続という意味も持っている。このようにベンチ墓が四部屋式住居を模しているということは、墓が死後の家として機能し、死後も家族が共に生前と同じように生活するというユダヤ人の死後観を反映していることができる⁽¹²⁾。ファウストとブニ

モビッツは、特定の死後観を反映させるために明確な意図を持って、ベンチ墓は四部屋式住居を模した形態へと定型化したと主張している(Faust and Buninobitz 2008: 161-162)。オスボーンも同様に述べており(Osborne 2011)、ベンチ墓が家族を表しているのに対し、複数の埋葬室を持つ大規模な墓は、より大きな一族を表している⁽¹³⁾と指摘した。

近年は、ブロック・スミスの指摘した定形と不定形のベンチ墓を明確に区別し、編年を組みなおす研究が進んでいる。イエゼルスキとハゼリムは、ブロック・スミスが同一のベンチ墓として扱ったタイプの墓を、不定形の母室に壁龕が掘り込まれるタイプの柵型壁龕墓(benched-niche tombs)と方形でピットを持つタイプのベンチ墓(bench tombs)と区別した(Yezerski and Hazerim 2013: 54-57)。しかし、新規の資料を加えた結果は、基本的にブロック・スミスの編年と同様であり、かえってその編年に妥当性があることを証明することになった。また、ブロック・スミス、イエゼルスキとハゼリムの編年は、共に分裂王国時代にベンチ墓の形態が確立すると、後の変化は複数の埋葬室を持つようになることのみであり、個々のベンチ墓は変化していないことを

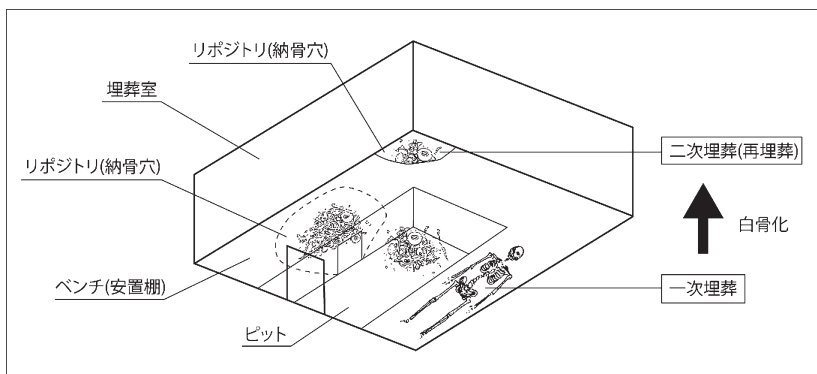


図1 ベンチ墓の形態及び埋葬方法

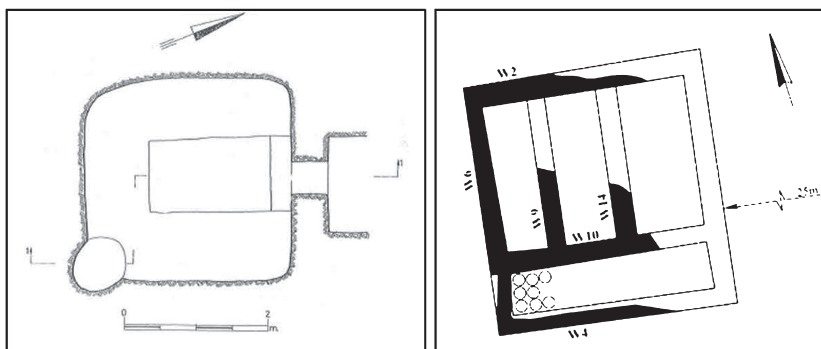


図2 ベンチ墓(左)と四部屋式住居(右)の平面図 (Kloner 2001-2002, 105; Feig 2016, 6 改変)

示している。

このように、ベンチ墓は華美な装飾もなく、副葬品も日用品であるにも関わらず、鉄器時代当時の人々の死生観に迫ることができる物的証拠として注目されている。特に、ベンチ墓の形態は当時の死生観を考える上で重要な要素であり、他の時代の研究と比較して編年研究が進んでいる。しかし、ベンチ墓は明確に中流・上流階級の家族に利用されていた墓であり (Bloch-Smith 1992, 49; Faust and Bunimobitz 2008, 152) 貧困層などの当時の全ての人々の埋葬を示すものでないことは留意されなければならない。都市部の貧困層の大多数は、おそらく簡素な土葬によって

死者を埋葬しており、それは後述のロクリ墓においても同様である。

四．ロクリ墓に関する研究史

ロクリ墓の研究もベンチ墓と同様に、当初は発掘調査の報告に留まっていたが、調査の成果が蓄積した一九五〇年代後半から様々な研究が行われるようになった。ロクリ墓は、当時の口伝律法における埋葬規定に従って造営されていたこと、被葬者の名前、身分、親族関係が分かる銘文があること、ギリシヤ建築の影響を受けた建築装飾があること、埋葬方法が複数確認されることなどから、その研究もベンチ墓と比較すると多岐に渡り、文献資料の比重が大きい。しかし、本稿では文献資料の研究成果にも触れつつ、主として考古学的研究の成果について三つのカテゴリに区分して記す。

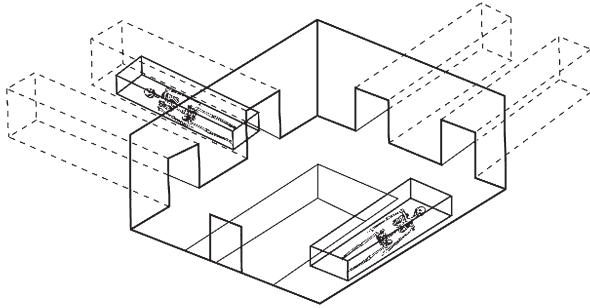
(一) 埋葬方法

ロクリ墓の埋葬方法について、ユダヤ人に特有の再埋葬について言及する研究はあったが (Meyers 1970)、その様相は不明瞭であった。それを体系的に述べたのはハクリリとキルブルーが初めてであり、エリコの発掘調

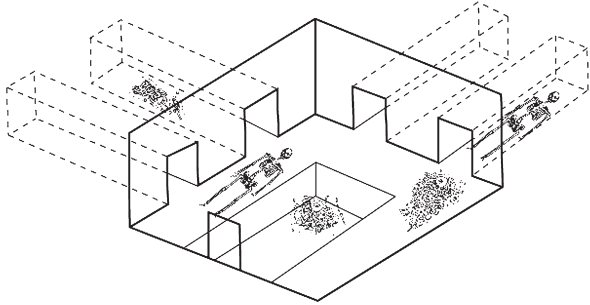
査報告の中でエルサレムを含めた二都市のロクリ墓の埋葬方法について三つに分類した (Hachili and Killebrew 1999, 167-171) (図3参照)。

一つ目は、木棺 (図4参照) を用いる埋葬であり、この埋葬方法は、ロクリ墓に関してはエリコでのみ確認されている。木棺の中には個人もしくは個人と近親者の遺体が入られ、墓の棚部分やロクリに安置される。前時代の集骨とは異なり、安置された木棺は移動されず、その中の遺骨も再埋葬されることはない。ハクリリとキルブルーは、エリコとエルサレムの気候の違いからエルサレムでは木棺が残存しなかっただけであり、エルサレムにも同様のタイプ設定が可能であることを指摘したが、木棺を留める釘や木棺の残滓が状態の良い墓であっても一例も確認されていないことから、エルサレムでは木棺による埋葬は利用されていなかったと考えられている (Kloner and Zissu 2007, 103-106) (14)。木棺は、エリコ以外にカムラン (Yaux 1956; Humbert and Chambon 1994) やエン・ゲデイ (Hadas 1994) において確認されている。しかし、これらの墓地は、エリコやエルサレムとは異なり、堅坑墓や簡素な横穴墓を利用している墓地であり、埋葬習慣も異なっている。これらの木棺文化については、

タイプⅠ：木棺



タイプⅡ：集骨



タイプⅡ：オシュアリ

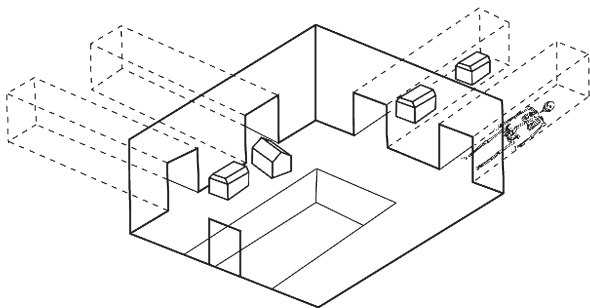


図3 ロクリ墓の埋葬方法モデル

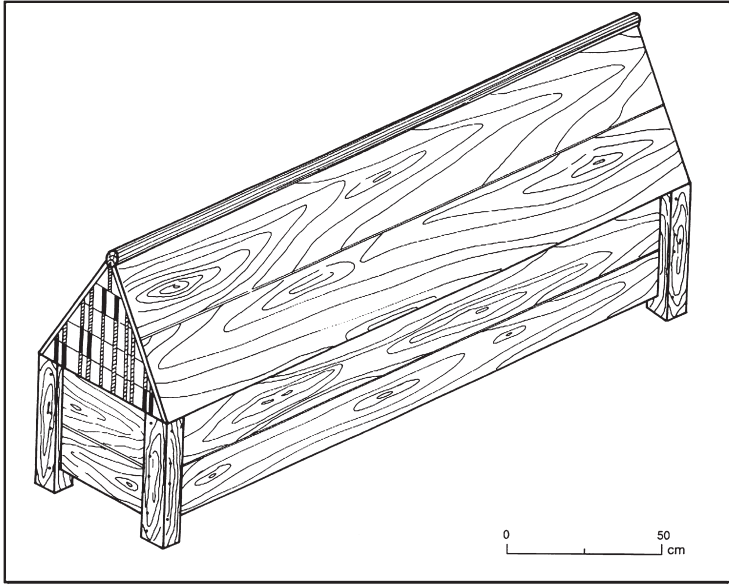


图4 木棺、エリコ、coffin 78 (Hachlili and Killebrew 1999: 72)



图5 オシュアリー (イスラエル博物館所蔵)

宗派の違いなどによって解釈されることもあるが、木棺を利用する要因や意味合いについては明確になっていない (Hachili 2005, 462-472)。

二つ目は、鉄器時代のベンチ墓と同様の集骨である。埋葬の手順及び方法は同様であるが、異なる点として、埋葬される場所が多岐に渡ることが挙げられる。ベンチ墓における一次埋葬の場所は柵部分であり、再埋葬の場所はリポジトリかピットであったが、ロクリ墓では一次埋葬の場所は柵部分またはロクリであり、再埋葬の場所は柵部分、埋葬室の四隅、ピット、ロクリと多岐に渡る。集骨は前一世紀末になるまで、ロクリ墓の主な埋葬方法として各遺跡で用いられ、前一世紀末に後述するオシユアリが出現した後も、オシユアリと併用して利用されていた。また、オシユアリを用いる埋葬も同様に再埋葬であり、イスラエルにおいては青銅器時代から第二神殿時代に至るまでの長期間、再埋葬が広く用いられていたことになる。

三つ目はオシユアリ (図5参照) を用いる埋葬方法である。オシユアリは、木棺やサルコファガス (石棺) のように遺体をそのまま安置できる大きさの棺ではなく、人間の大腿骨ほどの大きさの小型の石棺である。そのた

め、オシユアリに納骨するためには必ず再埋葬を行わなければならない。埋葬方法は遺体を白骨化させるまでは集骨と同様であるが、その骨を集めオシユアリに納骨する。集骨と異なる点として、複数人の遺骨を集め再埋葬を行うのではなく、個人もしくは個人と近親者の骨をオシユアリに納骨する点が挙げられる。そのため、オシユアリには被葬者の名前や職業、血縁関係などが彫られる場合もある。集骨の埋葬方法から、ロクリ墓も家族墓として考えられているが、オシユアリの銘文によって被葬者に明確な血縁関係があることが分かっている。オシユアリは前一世紀末に出現した新しい埋葬方法であり、ロクリ墓の利用が激減する七〇年まで最も多く利用される方法となる。

ハクリリとキルブルーは、これらの埋葬方法がエリコにおいては、個々の墓の年代関係、切りあい関係から木棺から集骨、オシユアリの順に変化していくことを指摘し、これがエルサレムの墓にも適用できると述べた。この見解は、後のハクリリの研究においても踏襲されるが、エルサレムの墓の分類 (Hachili 2005, 450-457) では、一つ目を伸展葬であるタイプ一に変更している (Hachili 2005, 450-451)。確かにロクリ墓において伸展

葬は確認されるが、それらは基本的に集骨に伴う一次埋葬であり、伸展葬のみが確認される墓はエルサレムではほとんど確認されていない。そのため、クロナーとジスは、エルサレムではベンチ墓の集骨が初期のロクリ墓において継続していたと指摘した (Kloner and Zissu 2007, 106-107)。エリコでは木棺のみを利用して墓が確認されていることも踏まえると、エリコとエルサレムにおいて異なる埋葬習慣があったことは明らかである。

また、新しい埋葬方法であるオシユアリに関しては、ハクリリとキルブルー以前から研究がなされている。特にその起源について、オシユアリの集成を行ったラフマニは、ユダヤ人特有の埋葬方法であり、明確な起源は明らかでない¹⁷⁾と指摘した (Rahmani 1994, 56-59)。オシユアリと類似した石棺はイランやローマ帝国で確認されているが、いずれも火葬した骨の骨壺としての利用であり、ユダヤ人の再埋葬とは異なっている。小型石棺という形態面で周辺地域から影響を受けた可能性はあるが、その使用方法はユダヤ人独自のものであり、オシユアリはエルサレムで出現して地域全体に広がっていたことは間違いないとラフマニは述べている (Rahmani 1994, 56-59)。オシユアリの出現とその拡散については、復活信仰と

の関わりが指摘されてきた (Rahmani 1994, 53-55; Hachili 2005, 527)。この復活とは肉体的な復活のことであり、ヘブル語聖書にも肉体の復活についての記載が存在する¹⁸⁾。家族の骨を個人が識別できないほど混ぜる集骨とは異なり、他人と遺骨が混じることなく納骨されるオシユアリは肉体の復活に適しているように考えられるが、クロナーとジスはこの見解を否定している。当時のユダヤ教はその思想によって分派が生じていたが、復活を信じるファリサイ派だけでなく、否定するサドカイ派も積極的にオシユアリを利用していたことが、銘文から分かっているからである。このことから、クロナーとジスは、オシユアリが必ずしも復活信仰と結びつくわけではなく、むしろ、家族埋葬の中で個人を重視し、表象するようになったのではないかと指摘した (Kloner and Zissu 2007, 116-119)。

このように埋葬方法については様々な研究が行われているが、埋葬の手順やその位置など、判明していない部分も多い。イスラエルの墓は基本的に盗掘の被害を受けており、当時の遺骨・副葬品の位置が保たれていない場合も多く、墓の状態は非常に悪い。また、それに加えて二〇〇〇年代以前の調査の精度が良好ではないため、遺

骨・遺物の出土位置が分からず、その位置的・时期的関係を把握することが困難であることも一因である。埋葬方法について研究する際は、これらのことを考慮する必要がある。

(二) 墓の形態

ロクリ墓の形態に関する研究は、ファサード⁽¹⁸⁾に関する研究を中心に始まった。ベンチ墓には墓の入口部分に建築装飾を伴うファサードが存在せず、通常岩壁に簡素な入口を設けるのみであるが、ロクリ墓にはギリシャ建築の影響を受けたファサードが存在する場合があるからである。しかし、当初はファサードに関する所見を述べるのみであり、体系的に研究は行われず、墓の内部形態などに言及する研究はほとんど行われなかった。ロクリ墓の全体的な構造に関する研究が盛んになり、その成果がまとめられ始めたのは一九八〇年代後半に入ってからである。ロクリ墓の形態に関する研究は、ロクリ、ファサード、埋葬室の三つに大別される。

まず、ロクリの形態については、その寸法について、多くの研究者が言及している。ロクリを含めたロクリ墓の寸法や製作方法などはミシュナーの埋葬規定⁽²⁰⁾に記載さ

れており、その数値と実際のロクリ墓の寸法を比較する研究が行われてきた⁽²¹⁾。しかし、第二神殿時代の一定でない尺度や掘り方の違いなどから確たる結論は得られていない。二〇〇〇年代になると、クロナーとジスは、二〇〇七年時点でのエルサレムの全てのロクリ墓のデータを集成し、そのデータを元にロクリの形態及び機能について考察した (Kloner and Zissu 2007, 61-68)。それによって、エルサレムのロクリは、①通常のロクリ (ordinary kokhim)、②幅が広いロクリ (broad kokhim)、③二人用のロクリ (double kokhim)、④二階層のロクリ (Two-story kokhim)、⑤二倍の長さのロクリ (Double-length kokhim)、⑥二階層に配置されたロクリ (Kokhim arranged in stories)、⑦収集用のロクリ (Collection kokhim) の七つに分類されることを示した。

①については、先述のミシュナーに記載されている寸法と近似しているロクリである。その寸法は、一般的に長さは約二メートル、高さ約七十センチメートル、幅約五十センチメートルと考えられている。このタイプは入口の幅と内部の幅が等しく、特徴的な構造も見られない。②は、入口の幅は①と同様であるが、内部の幅がそれよりも大きいタイプである。その機能としては、①よりも

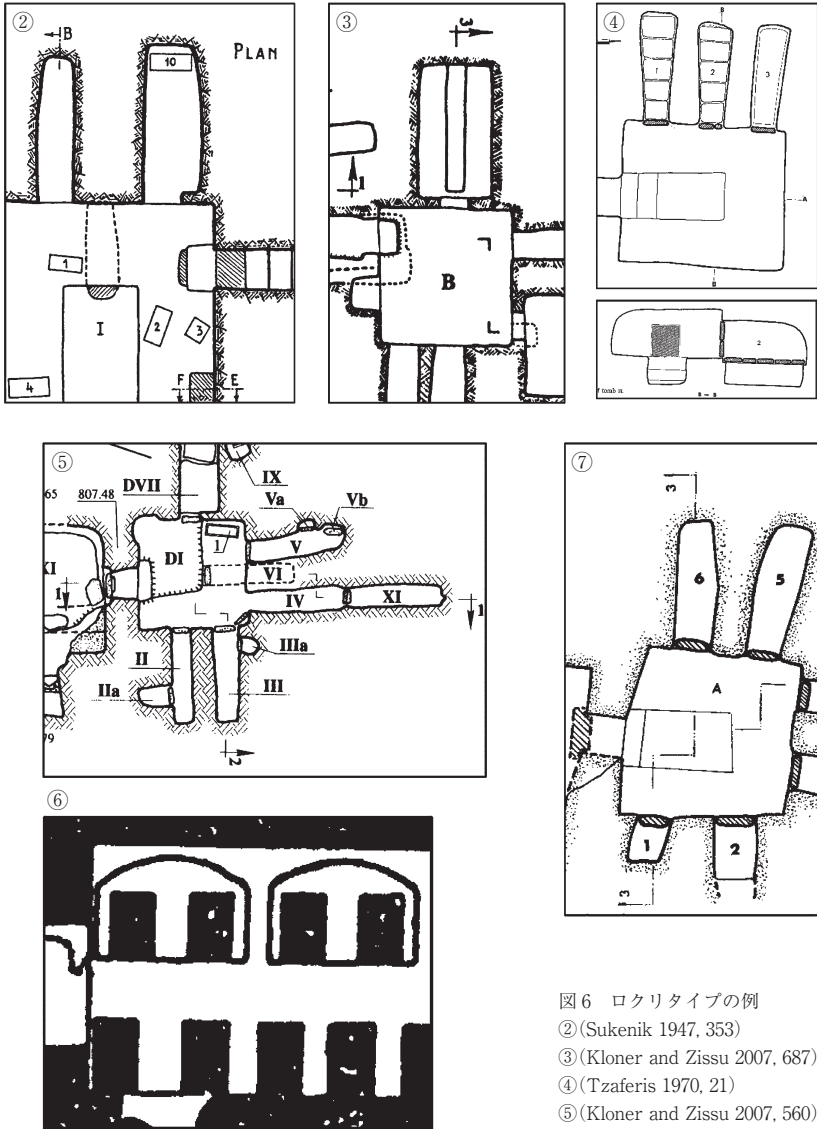


図 6 ロクリタイプの例
 ② (Sukenik 1947, 353)
 ③ (Kloner and Zissu 2007, 687)
 ④ (Tzaferis 1970, 21)
 ⑤ (Kloner and Zissu 2007, 560)
 ⑥ (Kloner and Zissu 2007, 770)
 ⑦ (Kloner 1980, 100)

集骨の納骨場所やオシユアリの貯蔵場所としての役割が強いと考えられている。③は②の派生形であり、②の中心に溝が掘り込まれ、区分けがされるタイプである。③の機能は②とは異なっており、この中心の仕切りによって同時に二人を一次埋葬することができると考えられている。④は二層の空間が作られるロクリであり、ロクリの床面が掘り下げられて下層にもう一つ空間が形成される。下層には壁面にふちが設けられ、その上に石板が置かれ上層の空間が作られる。この石板があることによつて、上層にもう一人分遺体を安置することが可能であるが、実際に石板の上に埋葬されている例はエルサレムには存在しない。そのため、二層構造をもつが実際に埋葬に利用されているのは下層のみである。⑤は、ロクリが二つ繋がっているタイプである。その機能については明確でないが、単純に限られたスペースの中の埋葬空間の拡張であると考えられている。⑥は、母室の壁面の上下にロクリが配置されるタイプである。これも⑤同様に埋葬空間の拡張であると考えられている。⑦は、小型のロクリであり、これまでのロクリとは異なり一メートル以下の長さのロクリである。その大きさから一次埋葬

に利用することは不可能であり、集骨の納骨場所やオシユアリの貯蔵場所として利用されていた。クロナーとジスは、これらの中でもタイプ①と②が最も一般的であり、それ以外のタイプは数が少ないと指摘している。先述のように、ロクリの寸法については多くの研究者が議論しているが、ロクリの形態について研究を行っているのはクロナーとジスのみである。

ファサードについては、先述のように個々の墓のファサードに関する言及はあったが、二〇〇〇年代になるとハクリリによつて、柱やペディメントなどの建築装飾から分類が行われた (Fachini 2005: 43-54)。しかし、その対象が限定的であったため、分類項目に当てはまらないファサードも存在した。そのため、後にクロナーとジスによつて新たにファサードの分類が行われた (Kroner and Zissu 2007: 61-69)。クロナーとジスも建築装飾から分類を行っているが、さらに細かい装飾の項目を設けていた。具体的な項目は本稿では割愛するが、ロクリ墓のファサードは、ベンチ墓と同様の簡素な装飾のないタイプとギリシャ建築要素を取り入れたタイプ (図7参照) に大別されることが分かった。後者は、その建築様式によつて様々なタイプに細分されるが、各タイプの数



図7 ギリシャ建築様式のファサード
(エルサレム、サンヘドリンの墓)

はそれぞれ数例であり、ギリシア建築様式のファサードを有するロクリ墓は少ないといえる。ロクリ墓は身分の高い層に利用される墓であるが、ギリシア建築様式の大規模な装飾を伴ったファサードを作ることができたのは、富裕層の中でも一部であったことがうかがえる。

このファサードによって墓の年代決定も試みられている (Forester 1978)。しかし、ドリス式など的大まかな建築様式による年代決定は可能であるが、細部の装飾による年代決定は行われていない。これは、オシュアリも同様であるが、植物などの装飾は、第二神殿時代及びそれ以降の時代に普遍的なものであり、銘文などがなければ、特定の時期を示すことは難しいからである。また、クロナーとジスの分類からも分かるように、ロクリ墓の大半は建築的な構造を持たない簡素なファサードであり、これによって一般的な墓の年代決定を行うことは困難であるといえる。

ロクリとファサードとは異なり、埋葬室に関してはその形態に特徴がないと考えられてきたため、埋葬室を中心とした研究は少ない。ロクリ墓の基本的な形態(図8参照)は、小さな入口、方形の埋葬室、その壁面に掘り込まれる子室であるロクリであり、それに加えて、墓の

高さが低い場合には、埋葬室にピットが掘り込まれるとハクリリは指摘している (Hachili 2005, 55-56)。埋葬室のピットについては、墓が低い場合の作業場所を確保する機能の他に、墓に流れ込む雨水の排水機能 (Kloner and Zissu 2007, 90-91)、集骨のために遺体を安置する機能 (Meyers 1971: 9; Kloner and Zissu 2007, 90-91) などが指摘されているが、実例を伴っているのは集骨のために遺体を安置する機能のみである。このピットを持つ埋葬室は、ベンチ墓との類似が指摘されており、ベンチ墓との関連性について近年議論が進んでいる(後述参照)。

先述の三つの要素以外にも、ロクリ墓には補助的な構造が存在する。例えば、埋葬室にピットとは異なる溝が掘り込まれた構造や、ピットの内部やロクリの内部に階段が掘り込まれ、別の墓に繋がる構造などである。これらは、個々の墓の状況によって設けられるもので普遍的に存在するものではないが、一定数確認される構造もある。その最たるものがアルコソリア(図9参照)である。アルコソリアは、ロクリとは異なり、横に長い棚型の壁龕であり、その形態からアーチ状のアルコソリア (*arcosolia*) と方形のクアドロソリア (*quadrrosolia*) に分

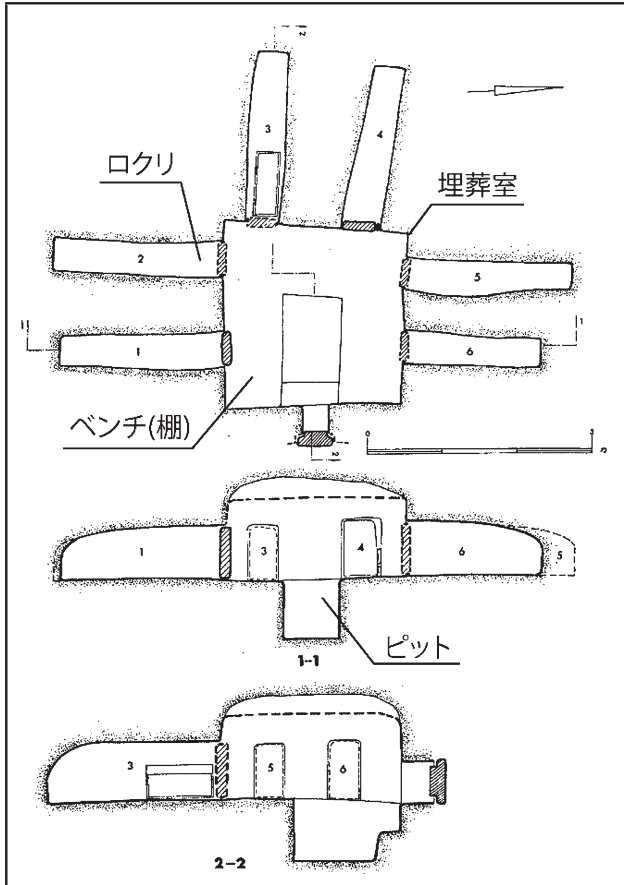


図 8 ロクリ墓の形態 (Kloner and Zissu 2007, 816 に筆者加筆)



図9 アルコソリア、アケルダマ、cave1
(Avni and Greenhut 1996, 4)

類される。

アルコソリアは、補助的な構造として設けられる場合とアルコソリア墓として独立して存在する場合がある。このアルコソリアまたはアルコソリア墓は、鉄器時代から確認されているが、アーチや方形の掘り込みが明瞭に定形化されたのは第二神殿時代に入ってからである。ロクリ墓が利用されるようになると、ロクリ墓の別の部屋として設けられるか、ロクリ墓の埋葬室に補助構造として設けられるなど、ロクリ墓に付随している場合が多く見られる。しかし、ベンチ墓やロクリ墓と比べると、アルコソリアが確認される墓は百基に満たず、さらに明確に年代が判明している墓に限定すると、その数は激減する。一方で、一世紀にユダヤ人が離散した後この構造は利用され続け、五世紀のベト・シエアラムなどの巨大墓地でアルコソリアが利用されていたことから、ユダヤ人の墓形態のひとつであることは間違いない。

アルコソリアは限定的な利用でありながらも、その由来や機能についてはベンチ墓、ロクリ墓と関係する部分も多く、両者の形態研究の中で取り扱われている。アルコソリアには壁を単に掘り込むタイプも存在するが、貯蔵空間(図10参照)を持っているものも確認されている。

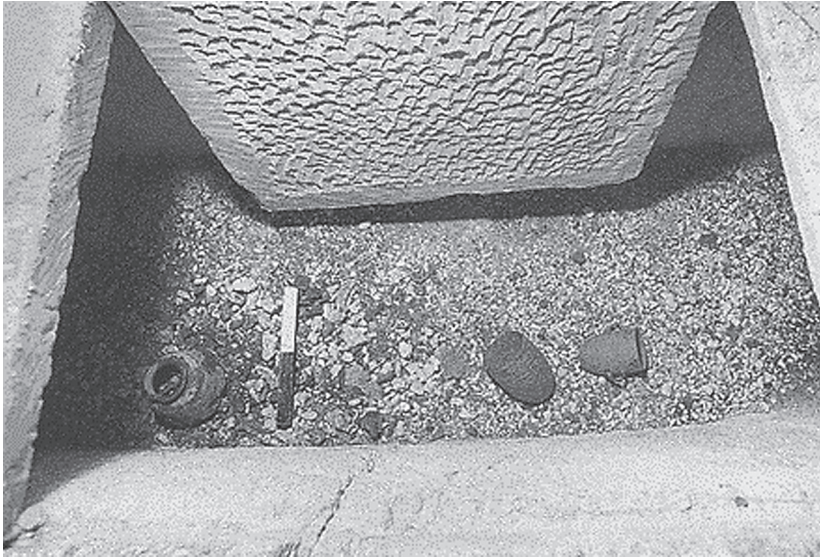


図 10 貯蔵空間、アケルダマ、cavel (Avni and Greenhut 1996, 13)

その機能としては、アルコソリアの柵部分で一次埋葬を行い、白骨化した後に遺骨を集骨、もしくはオシユアリに納骨し、下部の貯蔵空間、あるいはロクリなどの別の場所に納骨・安置するといったことが考えられる。また、ベンチ墓と同様に人形のヘッドレストが設けられる場合もある。これらのことから、アルコソリアは、ベンチ墓の発展形として出現したのではないかと指摘する研究者も存在する (Watzinger 1935, 70-71; Galling 1936, 76-77, 88)。ベンチ墓の研究者であるブロック・スミスもベンチ墓とアルコソリア墓の平面形態が類似していると指摘している (Bloch-Smith 1992: 41)。

しかし、クロナーとジスはこれらの研究者とは異なる見解を示している (Kloner & Zissu 2007, 85-86)。アルコソリアの柵部分で一次埋葬を行っていた可能性は想定できるものの、エルサレムではアルコソリアの柵部分で実際に一次埋葬を行っている例は一例も確認されていない。これはヘッドレストがあるアルコソリアでも同様であり、クロナーとジスは、これは単なる装飾であり一次埋葬を行っていた証拠にはならないと指摘している。エルサレムで確認される例の大半は、アルコソリアの上におシユアリが安置されているため、アルコソリアはオシ

ユアリの安置場所であったと指摘した。すでにアビガドが指摘しているが、貯蔵空間を持つアルコンソリアはサルコファガス型アルコンソリア (sarcophagus-like arcosolia) であり、石棺の機能を果たしていた (Avigad 1954, 118)。サルコファガス型は通常のアルコンソリアの柵部分を掘り下げ、貯蔵空間を作り、その上部に石板で蓋をすするタイプで、岩盤に一体化した石棺である。ベンチ墓との類似を指摘する研究者は、この蓋の上で一次埋葬を行い、骨を貯蔵空間へと納骨することを想定していたが、実際には蓋の上では埋葬が行われず、貯蔵空間で一次埋葬が行われていた。このタイプの場合、被葬者はロクリ以上に密閉され、強調されるため、家長や一族の長など、とりわけ身分が高い被葬者に利用されていたと考えられている。

このようにアルコンソリアは限定的でその例も少ないが、ロクリ墓で行われる埋葬に密接に関わっている。アルコンソリアがどの時期にどの程度確認されるのかは定かではないが、ベンチ墓からロクリ墓への変化を考える上では重要な構造であるといえる。

(三) ロクリ墓の起源

ロクリ墓はその発見当初から、これまでのイスラエルの墓形態とは異なると指摘されてきた。また、フェニキアやエジプト⁽²³⁾では、イスラエルよりも前からロクリ墓が利用されていることがあきらかになったこともあり、イスラエルのロクリ墓の起源もそれらの地域に求められるようになった。ピーターとティルーシユは、イスラエルの南側にあたるイドマヤに位置するマレシヤの墓(図11参照)の報告の中で、左右対称の構造や切妻屋根型のロクリなどがエジプトのアレキサンドリアの影響を受けており、このことからマレシヤを通してエルサレムへとロクリ墓が伝わったと指摘した (Peter and Tiersch 1905)。しかし、後にこの墓地の他の墓の報告を行ったオレンとラッパポートは、マレシヤのロクリ墓がプロトタイプであり、イスラエルに広がったことには同意しながらも、エジプト起源であることについては否定している (Oren and Rappaport 1984, 149-153)。マレシヤのロクリ墓の多くは、「シドン人の墓」に代表されるように、左右対称の墓であり、全ての墓で伸展葬が行われていた。これと類似する墓は、アレキサンドリアでも確認されるが、それらはフェニキア人入植地者の墓であり、ギリシ

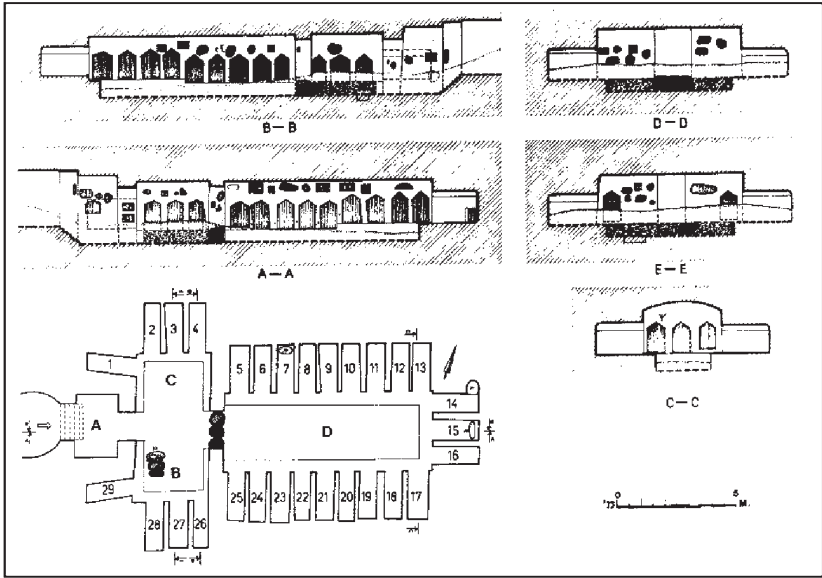


図 11 マレシヤの墓、Tomb N3 (Oren and Rappaport 1984, 122)

ア人やエジプト人の墓とは異なる部分が見られるからである。また、フェニキアの都市にもアレキサンドリア以前に同様の墓が見られることから、オレンとラッパポートはフェニキア人が西アジア全体にロクリ墓を拡散させる役割を担ったことを指摘した。このマレシヤの発掘調査を契機に起源研究は盛んになったが、タルはこれらの研究の整理を行い、ロクリ墓の起源について二説に大別した (Tal 2003)。

一つはエジプト説であり、先述のように左右対称の構造と切妻屋根構造の一致から、アレキサンドリアのロクリ墓がマレシヤへと伝わり、それがイスラエルへと広がっていったとする説である。タルはこの説について、アレキサンドリアのロクリ墓とマレシヤのロクリ墓の成立がほぼ同時期、もしくはマレシヤの方が早いこと、エジプトとは異なりイスラエルでは偽扉タイプの封石を用いず、火葬を行わないことなどから、エジプト起源説を否定している。また、切妻屋根構造についてはマレシヤのみならずエルサレムのロクリ墓においても確認されるが、エジプト由来の切妻屋根構造は既に青銅器時代にイスラエルへと伝わっていることから、この時代に伝わった構造ではないと指摘してい

る。

二つ目はフェニキア説であり、フェニキアからイスラエルへとロクリ墓が伝わったとする説である。先述のように、フェニキアのロクリ墓は西アジアで最古であり、これがアレクサンドロス大王の東征によってヘレニズムを媒介として各地に広がっていったことは疑いない。実際に、この最初の拡散期である前三世紀にロクリ墓が確認される都市は、アレキサンドリア、ドウラ・エウロポス、マレシヤといったヘレニズム都市であり、この拡散にはフェニキア人が大きな役割を果たしていた (Oran and Rappaport 1984, 149-153)。タルは、この流れの中にイスラエルも位置づけられると指摘している。イスラエルにこれらの都市よりも一世紀遅れてロクリ墓が出現したことは、エルサレムなどの都市がヘレニズム王朝によって作られた新しい都市ではないことが要因であり、また、プトレマイオス朝の寛容な支配もあってかロクリ墓を積極的に取り入れる必要性がなかったことも一因である。後の前二世紀になりセレウコス朝の統治下に入ってからロクリ墓が出現するが、その際にプトレマイオス朝下のエジプトから伝わったと考えるよりも、セレウコス朝下のフェニキアから伝わったと考える方が齟齬が生

じない。フェニキアとイスラエルのロクリ墓には、火葬は行われず、偽扉を用いないといった共通点があり、これらのことからタルはフェニキアがパレスチナのロクリ墓の起源であると述べている (Tal 2003, 289)。その一方で、当時のイスラエルには南北から影響があったことは事実であり、フェニキアのみから影響を受けているとは考えられないとも指摘している。また、フェニキア由来であっても、ヘレニズム化したフェニキア人によって伝わったのか、セレウコス朝のギリシア人によって伝わったのかは明瞭でなく、背景にヘレニズムがあることは無視できないとも述べている。

これらの説がある中で、ハクリリは基本的な形態の違いを考慮する必要性を指摘した (Hachili 2005, 69)。フェニキア、エジプト、イスラエルのロクリ墓には各々共通する点があるが、墓の規模の点で前二者とイスラエルのものでは異なっている。フェニキア、エジプトのロクリ墓は巨大な長方形の埋葬室と多量のロクリが設けられることが特徴であるが、イスラエルのロクリ墓は約二メートル×二メートルの小型の方形の埋葬室で、ロクリの本数も十に満たない。近年は、このような問題を踏まえて、ロクリ墓が周辺地域由来のまったく新しい墓で

あるということについて疑問を提示する研究も行われている。クロナーとジスは、イスラエルのベンチ墓とロクリ墓の類似性を指摘し、ピットを持つ埋葬室形態が類似していることから、ロクリ墓がベンチ墓の要素を受け継いでいると述べた (Kloner and Zissu 2007, 91-92)。その一方で、ベンチ墓のピットとロクリ墓のピットには違いがあることを述べ、ベンチ墓は墓の入口の高さよりも上部から掘り込みがある一方で、ロクリ墓は墓の入口の高さと等しい、もしくは下部から掘り込みがあると指摘した。さらに、このことを踏まえてクロナーとゼリンガーはこの類似を、ベンチ墓からロクリ墓への段階的な進化であると言及し、ベンチ墓からピットの掘り込み場所が変わるスタンディングピット墓、そしてそれにロクリが加わることでロクリ墓が成立したと述べた (Kloner and Zeligner 2009, 219)。

このようにイスラエルにおけるロクリ墓の起源は、明確にならないまま議論が続けられており、とりわけ二〇〇九年のクロナーとゼリンガーの研究以降は新規の議論も見られない。しかし、ロクリ墓がエジプト起源、フェニキア起源のどちらであっても両者は既にヘレニズム化した地域であり、それはヘレニズム化の中に位置づけられ

るのである。地域、民族が複雑に絡み合うヘレニズム時代において、パレスチナのロクリ墓の起源を明確に結論づけることは困難であるが、ヘレニズム化の文脈の中でパレスチナにロクリ墓が取り入れられたことは明白である。

五. 結び

これまで、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓、第二神殿時代末期のロクリ墓の研究を整理し、その成果をまとめてきた。冒頭で述べたように、両者の墓には密接な関係があり、異文化とユダヤ人というテーマを考える際には、伝統的なベンチ墓からヘレニズムの影響を受けたロクリ墓への変化という構図で考える必要がある。クロナーとゼリンガーは、このような構図で石切墓の進化を論じているが、その議論には、まだ様々な問題が存在することが明らかになった。

まず、ベンチ墓とロクリ墓の研究では、研究が集中する分野が異なっており、埋葬室の研究に関してはロクリ墓の方が遅れている。三章で述べたように、ベンチ墓の定形化や分布の変化などは明確に分かっており、また、その形態に込められた死後観についても研究が行われて

いる。これらを鑑みると、鉄器時代Ⅱ期の埋葬室の形態は、当時の人々の死後観の重要な物的証拠だといえるが、

ロクリ墓の埋葬室に関して、同様の研究は行われていない。平面形態の類似についての言及はなされているが、その類似が早期のロクリ墓に限定されるものであるか、利用期間の全てにおいて確認されるものであるかは明らかでなく、埋葬室の変遷自体ほとんど分かっていない。

この点は、単純な形態の変遷の問題だけでなく、ベンチ墓に込められた家族的な死後観が継続しているのか、それともヘレニズムの影響で新しい死後観へと変化したのかという問題とも関わってくる。ギリシア建築様式のファサードの研究は盛んではあるが、これはあくまで外部構造であり、死後観よりも権威や富を表象する意味合いが強い。一方、ロクリ墓の内部形態は単なる建築形態ではなく、生前の被葬者の考えが反映される重要な物的証拠である。実際に文書律法であるミシュナーには、「ある人が彼（被葬者）の家族（仲間）に墓を作るための土地を売り、彼の家族と契約した人が墓を作る。」（Mishna Baba Batra 6: 8, <http://www.sefaria.org/texts> 筆者訳）との記載があり、被葬者とその家族の意向で墓の建築が行われていたことは間違いない。今後、第二神

殿時代のユダヤ人の死後観を考える際には、より内部の構造に注目する必要がある。

また、ベンチ墓とロクリ墓共に定量的な研究が行われていないという問題がある。ベンチ墓に関しては、四部屋式住居との形態の一致が指摘されているが、全てが四部屋式住居と一致しているのかどうかはあきらかになっていない。これは形態研究の不十分さから生じる問題であり、ベンチ墓の形態の編年は組まれているものの、定形か不定形か、一つの埋葬室か複数の埋葬室かといった大枠のものであり、四部屋式住居との比較の際に争点となる埋葬室の形態は含まれていない。そのため、もし大半の墓が四部屋式住居と一致する埋葬室形態であればファウストとブニモビッツなどの研究者が指摘していることは妥当だといえるが、仮に他の形態が一定数存在するならば異なる考え方をしなければならぬ。ロクリ墓も同様に、集積が行われているにも関わらず、ロクリやファサードの分類が行われているのみで、それらの時期の変遷が実数で示されていない。先述の埋葬室に関しても同様である。これらを定量化データとして提示して初めて、それぞれの墓について具体的な議論を行うことができるであろう。

さらに、異文化とユダヤ人というテーマを論じる際には、何が異文化で、何がユダヤ人の文化であるのかを抽出しなければならぬが、この点も定義が不十分である。そのためには、イスラエルの墓の変遷を定量的に把握したうえで、他のヘレニズム都市のロクリ墓と同様の基準で比較することが必要になる。これは前時代との比較についても同様である。つまり、ユダヤ人の死後観と関係することが想定される埋葬室、ロクリについて様々な形態がどのように時空間的に分布するかを把握することによって、ロクリ墓にヘレニズム要素と伝統的な要素がどの程度確認されるかを検討することができるのである。それによつてはじめて、異文化に直面した中でユダヤ人の埋葬の在り方がどのように変化したかを議論することが可能になるであろう。

参考文献

- Amir, D. and Yezerski, I. 2001. "An Iron Age II Cemetery and Wine Presses at an-Nabi Danyal". *Israel Exploration Journal*, 51, 2, 171-193
- Avigad, N. 1947. "Architectural Observation on Some Rock-cut Tombs". *Palestine Exploration Quarterly*, 79, 119-122
- Avigad, N. 1954. *Ancient Monuments in the Kidron Valley*. Jerusalem
- Avigad, N. 1968. "The Architecture of Jerusalem in the Second Temple Period". *Qadmoniot*, 1-2, 28-36
- Avni, G. and Greenhut, Z. 1996. *The Akeldama Tombs: Three Burial Caves in Kidron Valley*. Israel Antiquities Authority Report
- Barag, D. 2003. "The 2000-2001 Exploration of the Tombs of the Son of Hezir and Zecharias". *Israel Exploration Journal*, 53, 78-110
- Bloch-Smith, E. 1992. *Judahite Burial Practice and Beliefs about The Dead*. JSOT Press, London
- Contentau, G. 2000. "Mission archéologique à Sidon (1914)". *Syria*, 1, 16-55
- Eshel, H. 1987. "The Late Iron Age Cemetery of Gibeon". *Israel Exploration Journal* 37-1, 1-17
- Faust, A. 2003. "The Four Room House: Embodying Iron Age Israelite Society". *Near Eastern Archaeology*, 66, 22-31
- Faust, A. and Bunimovitz, S. 2008. "The Judahite Rock-Cut Tomb: Family Response at a Time of Change". *Israel Exploration Society*, 58, 2, 150-170
- Feig, N. and Hadad, S. 2015. "Roman Burial Caves at Iblin". *Ahiqot*, 83, 93-123
- Forester, G. 1978. Architectural Fragments from Jason's Tomb Reconsidered. *Israel Exploration Journal*, 28, 154-156

- Ganor, A. and Ganor, S. 2016, "A Burial Cave from the Second-First Centuries BCE near En Gedi", *Athot*, 84, 65-78
- Geva, H. 1994, *Ancient Jerusalem Reweaved*, Israel Exploration Society
- Gratman, R. 1970, "Herod's Foot and Robinson's Arch", *Israel Exploration Journal*, 20, 60-66
- Hachlili, R. 2005, *Jewish Funerary Customs: Practice and Rites in the Second Temple Period*, Leiden
- Hachlili, R. and Killebrew, A. E. 1999, Jericho, *The Jewish Cemetery of the Second Temple Period*, Israel Antiquities Authority Report
- Hadas G. 1994, *Nine Tombs of the Second Temple Period at 'En Gedi*, *Athot*, 24
- Humbert J.-B. and Chambon A. 1994, *Fouilles de Khirbet Qumran et de An Feshkha I*, Fribourg
- Jidejian, N. 2000, "Greater Sidon and its "Cities of the Dead"", *National Museum News*, 10, 15-24
- Kloner, A. 1980, "A Tomb of the Second Temple Period at French Hill", *Jerusalem, Israel Exploration Journal*, 30, 99-108
- Kloner, A. 2001-2002, "Iron Age Burial Caves in Jerusalem and its Vicinity", *Bulletin of the Anglo-Israel Archaeological Society*, 19-20, 95-118
- Kloner, A. and Zeligler, Y. 2009, "The Evolution of Tombs from the Iron Age through the Second Temple Period", *Israel Exploration Society*, Jerusalem
- Kloner, A. and Zissu, B. 2007, *The Necropolis of Jerusalem in the Second Temple Period*, Peeters, Leuven
- Lipschits, O. and Oeming, M. *Judah and the Judeans in the Persian Period*, Indiana
- Magness, J. 2012, *The Archaeology of the Holy Land: From the Destruction of Solomon's Temple to the Muslim Conquest*, Cambridge University Press, Cambridge
- Mazar, A. 1990, *The Archaeology of the Land of the Bible, 10000-586 BCE*, New York
- Meyers, E. M. 1970, "Secondary Burials in Palestine", *The Biblical Archaeologist*, 33, 1, 1-29
- Meyers, E. M. 1971, *Jewish Ossuaries: Reburial and Rebirth*, Rome
- Oren, E. and Rappaport, U. 1984, "The Necropolis of Mare-sha-Beth Guvrin", *Israel Exploration Journal*, 34, 114-153
- Osborne, J. F. 2011, "Secondary Mortuary Practice and the Bench Tomb: Structure and Practice in Iron Age Judah", *Journal of Near Eastern Studies*, 70, 1, 35-53
- Peter, J. P. and Tiersch, H. 1905, *Painted Tombs in the Necropolis of Marisa (Maresha)*, London
- Rahmani, L. Y., 1967, "Jason's Tomb", *Israel Exploration Journal*, 17, 61-100
- Rahmani, L. Y. 1994, *A Catalogue of Jewish Ossuaries in the Collection of the State of Israel*, Jerusalem
- Renan, E. 1871, *Mission de Phénicie*, Paris

- Rothschild, J. J. 1952, "The Tombs of Samhedia - I", *Palestine Exploration Quarterly*, 84, 23-28
- Stern, E. 1962, "Measures and Weights", *Encyclopaedia Biblica*, 4, 846-852
- Tal, O. 2003, "On the Origin and Concept of the Loculi Tombs of Hellenistic Palestine", *Ancient West and East*, 2/2, 288-307
- Tzafiris, V. 1970, "Jewish Tombs at and near Giv, at ha-Mivtar, Jerusalem", *Israel Exploration Journal*, 20, 18-32
- de Vaux R., 1956, Fouilles au Khirbet Qumran-Rapport préliminaire sur les 4e et 5e campagnes, *Revue Biblique* 63, 533-577
- Vent, M. 2002, *Monumental Tombs of Ancient Alexandria*, Cambridge University Press, United Kingdom
- Yezeriski, I. 2003, "Typology and Chronology of the Iron Age II-III Judahite Rock-Cut Tombs", *Israel Exploration Journal* 63, 50-77
- 安積鋭二、泉治典 1995 『ATD旧約聖書註解』23 エゼキエル書下一九一四八章』ATD・NTD聖書註解刊行会
- 大戸千之 1993 『ヘレニズムとオリエン』ミネルヴァ書房

註

(1) 本稿の対象年代において、同地域の範囲及び呼称は各時代において異なるため、本稿では現国名である「イスラエル」に統一して表記する。

- (2) たとえば、大戸(一九九三)。
- (3) 律法は当初は口伝律法であり、紀元前に文書化されていない。神殿崩壊後の離散を契機に、ラビ・ユダ・ハナシによってミシュナー(ユダヤ教法典)が二百年頃に編纂された。
- (4) 歴史区分ではイスラエル王国時代にあたる。前一〇〇〇年から前五八六年。
- (5) 岩盤を掘り込んで製作する墓。「rock-cut tomb」を筆者が訳した用語。
- (6) プトレマイオス朝期には、ヘレニズムの影響を受けた新しい墓は出現していない(Kloner and Zissu 2007, 139)。文献資料研究から、プトレマイオス朝の支配は後のセレウコス朝の支配と比較して寛容なものであり、ユダヤ人が自らの文化・思想を保つことができたことが分かっている(大戸一九九三、二七九頁)。
- (7) ロクリ(loculiは複数形、単数形はloculus)はラテン語であり、ヘブライ語ではコキーム、コヒーム、コヒム(kokhim、単数形はkoki)と呼称する。ロクリ墓においては基本的にこの構造が複数設けられるため、本稿では「ロクリ」と表記する。
- (8) プトレマイオス朝と比較して、セレウコス朝はヘレニズム化の政策を強行に推し進めた。また、それ以前からヘレニズムに憧れ傾倒するヘレニストと呼ばれるユダヤ人が現れ、セレウコス朝期にはユダヤ教の思想を固守する敬虔派を上回っていた。しかし、アンティオコス・エピファネスが発したユダヤ教礼拝堂の完全廃止、ギリシ

ア的祭儀の導入などの過激な試みに双方から反発が起り、結果としてハスモン朝が成立することになった（シユラー二〇一二年、二〇五―二〇七頁）。

(9) イゾリン (Feig and Hadad 2015)・ハリーム (Sellars and Baranki 1953) など。

(10) 石切墓の入口は岩壁に掘り込まれ、入口を入つてすぐ広い部屋が設けられる。この部屋のことを埋葬室と呼称する。

(11) ブロック・スマイスの分布調査によると、北イスラエル王国にはベンチ墓はほとんど分布していない。しかし、それ以外のタイプの墓の数も少なく、これは現在の政治的・考古学的調査状況の結果生じた現象であるとも考えられる。北イスラエル王国の範囲は、沿岸部を除いて現在のパレスチナ自治区に相当する範囲であり、同地域の考古学的情報は乏しい。実際に後に行われたエリコの調査 (Hachili and Killebrew 1999) ではベンチ墓が確認されていることもあり、北イスラエル王国の範囲まで広く分布していた可能性もある。

(12) ベンチ墓が家を模しており、その形態に死後観が込められている点については、マザールが「この家のような洞窟墓は、死後の生活への考えを表している」(Mazar 1990, 521) と言及しているように以前から議論が存在する。また、直接的な議論ではないが、ベンチ墓の副葬品が日用品中心であること (Bloch-smith 1992) からもし生前への意識があることは指摘されていた。

(13) 通常ベンチ墓は一つの入口に一つの埋葬室が設けられ

るが、入口は一つでありながら複数の埋葬室を持つ大規模な墓 (multi-chambered tomb) が存在する。エルサレムでは、ケテフ・ヒンノム (Barkay 1994)・聖エティエンヌ修道院 (Barkay and Kloner, Mazar 1994) で確認されている。墓の形態はベンチ墓と同様であるが、このタイプの墓はより精密であり、ほとんどの墓の遺体を安置する棚の頭部にあたる場所に枕が彫り込まれている。

(14) ミシユナーのオホロット 2:33 など文献資料には、木棺やサルコファガスなどの棺の利用についての記載が存在する。しかし、これを裏付ける考古学的証拠は、第二神殿時代のエルサレムにおいては確認されていない (Kloner and Zissu 2007, 104)。

(15) クムランはユダヤ教の主流からは分離したエッセネ派のクムラン教団の居住地である。

(16) ベンチ墓、ロクリ墓共に一次埋葬の場所が墓内とは限らないとの指摘もある。その要因として文献資料にどこか別の場所（別の墓や土中）を暗示する記載が存在する (Hachili and Killebrew 1999, 170; Kloner and Zissu 2007, 72-74) が挙げられるが、実際に墓の中で一次埋葬・再埋葬を行っている考古学的証拠 (Rahmani 1967; Tzafaris 1970) が多数ある中で、一次埋葬を墓外で行っている考古学的証拠がないため、墓内での一次埋葬が一般的であったと考えられている。

(17) エゼキエル書三七章一―四節「枯骨の幻」に詳しい。

(18) 建築物の正面部分（入口部分）を指す用語。石切墓においては、墓の入口が設けられる箇所を指す。

- (19) たとえは、Avigad 1947; Rothchild 1952; Rahmani 1967.
- (20) ミシュナー記載の埋葬規定は抽象的なものではなく、細部に至るまで規定が存在する。例えば、ミシュナーのババ・バトラ9:8では、「ある人が彼(被葬者)の家族(仲間)に墓を作るための土地を売り、被葬者と契約した人が墓を作る。彼(契約者)は墓の内部(埋葬室を指す)を四キュビット(概ね一キュビット＝四三～五三cm)×六キュビットで作り、八本の壁龕(ロクリを指す)を作る。左右の壁に三本ずつ作り、入口の向かいに二本を作る。壁龕の長さは四キュビットで、高さは手幅で七、幅は手幅で六で作る。…(略)」(<http://www.sefaria.org/texts/筆者訳>)のよいうな記載がある。
- (21) たとえは、Stern 1962; Grafman 1970.
- (22) たとえは、Renan 1871; Jidejian 2000; Contenau 2000.
- (23) たとえは、Venit 2002.
- (24) フェニキアのシドシヤアムリットでは前八世紀頃から、エジプトのアレキサンドリアでは前三世紀頃からの利用が確認されている。
- (25) アレキサンドリア、マレシヤ共にロクリ墓の利用が確認されるのは前三世紀からである。マレシヤに関しては、前四世紀末まで遡る可能性がある(Oren and Rappaport 1984)。